

## 障害者就労B型事業所に通う自閉症者のこだわり行動の減少

## Reduction of perseverative behavior for autism person who goes to Job Training

佐藤 美代子 (Miyoko Sato) 指導：佐々木 和義

1. 問題 わが国では、1960年の精神薄弱者福祉法の制定に至るまで、知的障害者への制度的な取り組みはほとんどなかったと言ってよい。それ以前の在宅生活者は貧困などによって著しく悲惨な状況であったことが指摘されている(小澤, 1996)。1960年代以降入所施設の整備が行われてきた。しかし、2006年4月の障害者自立支援法により、障害者に対するサービスの計画的な整備、就労支援の強化、地域生活への移行の推進等を通じ、障害者が安心して暮らせることのできる地域社会の実現を目指し、入所施設から多くの人たちが地域に移行されてきた。その中には、わが国には10万人に21人の割合でいると言われている自閉症者(本田, 1996)も地域移行している。先行研究では、岡村・藤田・井澤(2007)の小規模作業所に通う激しい攻撃行動のある自閉症者に対して、機能的アセスメントおよびそれに基づく支援計画を立てて、「平手で相手の頬・頭を叩く」という攻撃行動、攻撃兆候行動の減少を図った研究があるが、自閉症者がその問題行動の改善が見られないまま入所施設から地域移行されて、地域の中で改善されたという研究は少ない。自閉症者は問題行動を抱えたまま生活している現状がある。

2. 目的 本研究では、成人自閉症者で入所施設からグループホームに地域移行され就労継続支援B型事業所に通っているA子の、こだわり行動の減少を図ることを目的とする。そのこだわり行動は、大きな声で「おかあさんいない、あたしひとりなんだ。」と怒鳴る独語である。その独語は、高齢で寝たきりの親を抱えている他の事業所利用者を不安にし、A子と他の事業所利用者との関係を悪化させていた。

3. 方法 対象者：B型事業所に通う自閉症者、A子。標的行動：こだわり行動は「お母さんいない、あたしひとりなんだ。」他8つの言語フレーズと9つの動作。

介入期間：20××年10月3日から11月2日までのうちの20日間。午前9時から11時までとし初めの10日間はベースライン期、後半10日間は介入期とする。

介入方法：単一実験法、ABデザイン。他行動分化強化により独語を言わずに作業ができたことをほめた。

統計的検定：介入ポイントランダム振り分けによるランダムマイゼーション検定を用いた。

介入場所：A子に通う就労継続支援B型事業所の作業場。

研究倫理：早稲田大学における「人を対象とする研究に関

する倫理委員会」による承認を得た(承認番号2011-226)。

4. 結果 こだわり行動言語フレーズ9つの出現回数と時間の長さこだわり行動動作9つの出現回数と時間の長さを計測した。一番減少を図りたい「おかあさんいない、あたしひとりなんだ。」と大声で怒鳴る独語フレーズの実験結果グラフはFig. (回数)である。このフレーズの回数と時間の長さ、と「あたしひとりなんだ。一人で全部やっている。」(回数)の有意確率は0.05となり介入後有意に減少した。「蛇口を拭く」は介入後、平均回数・時間の長さも若干減少し有意確率は0.74、0.42で「靴をそろえる」は回数が増え時間の長さはほぼ変わらず、有意確率はそれぞれ0.42で帰無仮説を棄却しなかった。

5. 考察 今回の研究対象である怒鳴る独語について他行動分化強化により、それを言わずに作業した時「静かにお仕事できたね。」とほめたことで、介入開始日から終了日まで、介入の効果がみられこだわり行動が減少した。作業能力がそれ程高くないA子が作業をほめられることは、めったにないことなので嬉しかったと思われる。また、介入前日に服薬を始めたことや介入4日目に抜歯したことにより、10日間という短い期間に医療行為が継続的に生じたことで、A子のいつもの独語が薬や歯医者との話題に入れ替わったと思われる。

6. 今後の展望 B型事業所の利用者は障害程度の幅が広く問題行動もまちまちである。今回のように、通所先での自閉症者のこだわり行動の改善には、その成果が見られたが、生活の場であるグループホーム等でのこだわり行動の減少については今後の課題である。

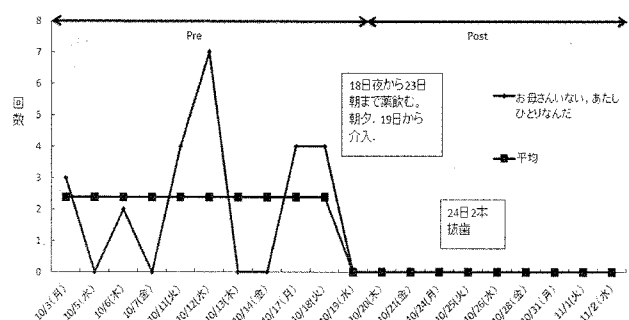


Fig. 1 こだわり行動が低減した1例「お母さんいない、あたしひとりなんだ」の出現回数